天理大学広報誌

はばたき

HABATAKI

Vol.50

特集 志を、受け継ぐ。

-TENRI PIONEERS-

見続ける夢は、終わらない。
教員としてのセカンドキャリアに挑んで。

保健体育科教諭 山口 小織 さん

– ONGOING PROJECT –

外交官養成プロジェクト

– INTERVIEW –

人間学部 人間関係学科 臨床心理専攻4年生 堅田 萌恵 さん
在ボツワナ日本国大使館 派遣員 沖廣 一正 さん

発行元:天理大学　編集:天理大学学長室広報・社会連携課
住所:〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050
TEL:0743-63-9006
発行日:2022年1月　号数:50号(Total 250号)

TENRI UNIVERSITY

情熱のバトンを、つなぐ。

随分、遠くまで来た。
振り返ると広大なフィールドに、うっすらと足跡が見える。
迷いながら、私は真っ直ぐに進んできた。
荷物はできるだけ少なく、思い出を詰め込んで。

目標に向かって努力し続ける道のりは長く、
ときにそれは、長く終わりのない持久走にも思える。
しかし、私たちはひとりで走ってきたわけではない。
そっと背中を押してくれた恩師、
道が分かれるまで隣で支え合った友人、
理解しサポートしてくれた家族——
そして掌に握られたバトンは、先人たちから受け継がれたものだ。

天理大学では、開校から現在まで90年以上に渡り、
多方面で活躍する卒業生を輩出してきた。
彼・彼女たちに共通する宗教性・国際性・貢献性というキーワードは、
「天理大学らしさ」として、後世に脈々と受け継がれている。
こうした“継承”は、孤独な挑戦を後押しする力になる。
先輩たちが積み上げてきたヒントが足下を照らし、
進むべき道筋を教えてくれるからだ。

誰かの想いが詰まったバトンを手に、
私は今日も、目的地をめざす。
伝統をヒントに、情熱を手がかりにしながら。
次のランナーに想いを受け継ぐ、未来のその日まで。

自分を超えて、未来を拓く

TENRI PIONEERS

見続ける夢は、終わらない。教員としてのセカンドキャリアに挑んで。

TENRI PIONEERS
保健体育科教諭

山口 小織（やまぐち さおり）さん

体育学部体育学科健康学コース、1996年3月卒業。大学卒業後、民間企業への就職と結婚・出産を経て、教員採用試験に挑戦。非常勤講師を経て、二度目の受験で合格。現在、大阪府立港南造形高等学校（大阪府教育委員会）にて保健体育科の教諭として勤務。

「きっかけは、高校の同窓会でした。既に教員となっていた同級生に『なんで先生をやっていないんだ』と言われて。絶対になった方が良いよと2時間ほど説得されたんです」。

そう話すのは山口小織さん、体育学部の1996年卒業生だ。現在は大阪府の高等学校で保健体育科の教諭として勤務している。そんな山口さんが教員になったのは、実は10年前。大学卒業後に民間企業への就職と結婚・出産を経て、子どもたちが小学生となったタイミングで大阪府の教員採用試験を受験、二度目のチャレンジで合格となり、38歳でセカンドキャリアをスタートさせた。

「採用試験を受けると決めたものの、大学卒業から10年以上が経過しており、家事や子育ての合間に勉強したり、実技試験に向けて近所のプールに泳ぎに行ったり、真夏に持久走をしたりと、実際は大変でした。ただ募集要項を見たら、年齢上限まであと10回は受験できるなと。それなら受かるまで何度でも挑戦する気持ちで、隙間時間を見つけて準備に励みました」。

「何度でも挑戦する気持ちで、時間を見つけて試験の準備に励みました」。

恩師のようになりたくて。社会人や育児の経験を活かし、生徒と向き合う日々。

山口さんが教員を志すようになった契機は、中学生の頃のある出会いだった。

「所属していた陸上部に威厳のある顧問の先生がいて、当時は厳しい先生という印象が強かったのですが、実は私たち生徒を陰から見守り、支えてくれていたことに、卒業してから初めて気がついたんです。私もこんな大人になりたい、そう感じて教員を志すようになりました」。

体育の先生をめざして天理大学体育学部に入学し、ゼミでは栄養学を専攻。「プロテイン使用の実態と使用方法の工夫」をテーマに、卒業研究を執筆した。陸上部の仲間と友情を育みながら、教員免許状の取得に励んだ。

「少人数制のもとで、友人や先生と近い距離感で学べたことが、天理大学の魅力でした。部活動の仲間とは、今でも定期的に集まり、助言を交わし合う仲です」。

しかし、卒業当時の教員採用試験の倍率は今では考えられないほど高く、目標は一度断念。そして今、長年の夢をようやく叶えた山口さんは、社会人や子育ての経験があるからこその視点を活かしながら、日々仕事と向き合っている。

「同期はほとんど新卒というなかで、もしかしたら私の方が人生経験は豊富かもしれません。でも、大学でしっかり勉強されてきたばかりの同期の方が詳しい事情も数多くあるはずなので、年上だからという理由で決して奢ることなく、いつも謙虚に人とかかわるように心がけています」。

そんな山口さんには、ある生徒との印象的なエピソードがある。

「登校が難しくなり、出席日数が足りなくなりそうだった生徒に、毎日電話をしたところ、なんとか学校に来られるようになって。その生徒が卒業する際、手紙をくれたんです。先生が声をかけてくれたから、頑張っ

てみようと思えたと。その言葉は本当にうれしく、教師冥利につきるものでした」。

彼女も、私の「先生」のひとり。体育学部に入学した娘とともに理想の教員をめざしながら。

山口さんが教員としてのキャリアをスタートさせたとき、小学生だった末っ子の晴加さんも、今は大学3年生。彼女も母と同じように天理大学体育学部に入学し、スポーツ文化コースでダンスに励みながら、保健体育科の教員をめざし、中学生の放課後学習を支える「天理まなび支え合い塾」など、教育関連のボランティア活動も熱心に行う。そんな娘に対しても、〝謙虚な姿勢〟を常に意識しているのだと、山口さんは話す。

「最新の教育を受け、私にはできないダンスを専門にする彼女は、ある意味で私の先生です。ダンスの授業では、娘に教えてもらいながら準備することもあるんですよ。彼女が同じように教員をめざしていると聞いたときは、外から見るより大変だし、現実には授業以外の仕事も多いよとの話もしました。でもやりたい気持ちがあるのならば、ぜひ頑張ってほしいと思っています」。

夢を支えた「人とのつながり」。恩師への手紙に綴った感謝の気持ちと意気込みを胸に。

教員採用試験に合格した後のことだ。山口さんは、恩師に手紙を出した。

「教員になるきっかけとなった、中学校の先生に、『先生のようになるのが目標です』とお手紙を書き、お返事もいただきました。手紙には、教員として活躍するためには家族にも配慮する必要があるという助言に加え、『38歳で奮起してよく頑張りましたね』と激励する言葉が記されていました」。

大切な人とのつながりは、ほかにもある。

「高校時代の陸上部の顧問は、天理大学の卒業生だったんです。全てを受け入れるような懐の深い先生で、未熟だった高校時代にはそれを理解できないほどで。その先生が同窓会などで、教員になった私のことを自慢してくれていると耳にして、とてもうれしい気持ちになりました。さまざまな人との出会いやサポートがあったからこそ、夢を実現できたと思っています」。

そう感謝の言葉を述べながら、山口さんは、進路選びの岐路に立つ後輩たちへのアドバイスをこう語る。

「学生時代は、やりたいことと、実際にできることの間にギャップを感じたり、今取り組んでいることに本当に意味があるのかと悩んだりすることもあると思います。でも、いつ・どこで・どんな風に、何がプラスに活きてくるかは分からないものです。今やっていることの全てを無駄だと思わずに、さまざまなことに挑戦してみてください」。

EDITOR'S NOTE

●受け継がれる情熱 ── 天理大学体育学部のDNAとは？

保健体育科の教員をめざす人にとって、天理大学体育学部は絶好の場所です。教員免許状取得に特化した授業はもちろん、スポーツ栄養学などの幅広い分野から学びながら、心身をバランスよく発達させるための視点を身につけることができます。また、「教員採用支援室」などの指導により、将来自分がどのように生徒に接するべきか、どのようなアドバイスをするべきかに気づき、現場感覚を磨きます。こうした学びの提供を通じ、本学部では1955年の開設以来、多数の教員を教育現場に途切れることなく送り出してきました。文字通り全国各地で卒業生が活躍し、想いやりにあふれた指導が高く評価されています。

特筆すべきは、こうした伝統が後世へと受け継がれている点です。本文中の山口さん親子のように、家族や親戚、中学・高校に天理大学出身の教員がいたことから刺激を受け天理大学に入学する学生が多数います。情熱あふれる教育姿勢は、天理大学体育学部の遺伝子として、次の世代へと循環を続けています。

TENRI CHALLENGERS

人間学部 人間関係学科
臨床心理専攻 4年生

堅田（かたた） 萌恵（もえ）さん

2018年4月、入学。ゼミにおいて夢分析と非行少年をテーマに取り組む。2020年2月よりドイツのマールブルク大学に交換留学。現在は心理専門職をめざし、大学院進学に向けて勉強に励む。

可能性を信じ、貫くこと。心理専門職となり、人を支えたい。

「心理学に興味を持ったきっかけは、高校生の頃に読んだ本でした。その後ドラマで見た箱庭療法に関心を深め、箱庭療法を日本で初めて導入した歴史があり、奨学金も充実している天理大学へ進学しました」。

堅田萌恵さんは、人間学部人間関係学科臨床心理専攻の4年生。臨床心理士・公認心理師をめざし、現在は大学院への進学に向けて、勉強に励んでいる。

「特に興味を持っているのは、ユング心理学です。ゼミでは『夢分析と非行少年』をテーマに挑んでいます。臨床心理専攻では、1・2年次に概論を、3年次からは演習や実習を通じて学びます。先生からの的確な助言のもと、クラスメイトと対話したり、一緒に考えたりする生のやりとりが充実しています」。

心理学の書籍をドイツ語で読んでみたくて。マールブルク大学に交換留学。

実は堅田さんには、心理学以外にも熱心に取り組むものがある。それは、ドイツ語の勉強だ。

「大学2年生の頃から、交換留学を視野に入れてドイツ語の勉強を始めました。心理学関係の本をドイツ語で読んでみたいと考えたことがきっかけです。ドイツ語の授業を担当する森本智士先生から民間の語学学校も紹介していただき、週に2回ほど通いました。国際交流センター室にも相談を重ね、マールブルク大学への交換留学に出発したのは、大学3年生のときでした」。

さまざまな交流が視野を広げた。私も人を支えたい――想いを強めた異国での1年間。

マールブルク大学での滞在は、堅田さんにとって非常に有意義なものとなった。まず、〝タンデム〟と呼ばれる制度を利用し、日本語を勉強するドイツ人の語学パートナーとの交流で、語学力を向上させた。

「タンデムでは、パートナーから尋ねられる日本文化や歴史に関する『なぜ』に答えられなければなりません。もっと自文化を

「クライエントと一緒に悩み、一歩ずつゆっくりと前へ進む――そんなプロフェッショナルをめざしたいです」。

知っておけばよかったと後悔も感じましたが、こうしたやりとりのなかで言語力が鍛えられました」。

また、現地でのさまざまな交流も視野を広げてくれた。

「マールブルクには天理大学の卒業生も暮らしており、永住権の獲得に向けて準備をされている方もいらっしゃいます。そうしたつながりから現地在住の日本人との交流機会が生まれ、食事をともにしたり、困ったときに相談に乗っていただいたりしながら大いに刺激を受けました。さらに、韓国からの留学生と、授業が終わると学生寮のキッチンでお互いの伝統料理を作り合って食べたのも良い思い出です。語学力もまだまだ足りなかった私ですが、多くの人に助けられながら留学を無事に終えたことで、私も人の助けになりたいという想いを強めました」。

他者に共感し、寄り添えるプロフェッショナルに。進学に向けて準備に励む毎日。

ドイツ留学を経て、大きく成長した堅田さん。今まで日本とはどこか別の世界だと感じていた海外も、現地で暮らし、その土地の言語で話し、交流を重ねると、人間としての根本は皆同じなのだと気がついたという。それは人の心理を学ぶ彼女にとって、意義のある学びとなったそうだ。そんな堅田さんは、心理専門職に必要な資質をどのように捉えているのだろうか。まっすぐ前を見据えながら、彼女はめざす人物像についてこう話した。

「クライエントと一緒に悩み、耐えながらも一歩ずつゆっくりと前へ進む――そんなプロフェッショナルをめざしながら、まずは大学院への進学に向けて準備したいと思います」。

EDITOR'S NOTE

●併設大学院との連携 ― 心理専門職資格の高い合格率を記録

天理大学では1955年から一般の方を対象に心理相談活動を行ってきました。この活動に携わっていたのが日本の臨床心理学の礎を築いた河合隼雄先生です。1965年、河合先生が心理療法の重要手法の一つである箱庭療法を日本で初めて取り入れました。50年以上にわたり培われた心理相談活動と心理療法の伝統は、人間学部人間関係学科臨床心理専攻に受け継がれています。そんな本専攻の特徴は、少人数制のもとでのきめ細やかな教育です。学生定員30人に教員6人という環境のもと、豊富な実習などを通して、体験的に「生きた知」として修得することをめざします。また、心理専門職に就くうえで大学院進学は必須ですが、その前段階に求められる学部カリキュラム条件は、本専攻で全てクリアされています。併設する大学院（公認心理師資格対応・臨床心理士１種指定校）へと体系だったカリキュラムが充実しており、大学院臨床人間学研究科臨床心理学専攻における2021年の公認心理師合格率は100％と高く、また臨床心理士合格率は60％を記録しています。

ひとを想い、行動できる情熱を。

—ONGOING PROJECT—
外交官養成プロジェクト

天理大学では、2018年末より「外交官養成プロジェクト」を実施しています。
試験と面接を経て選抜された学生は、1年生から3年生にかけてハイレベルな語学力と国際的に通用する教養を身につけるための
「外交官養成セミナー」を受講し、4年生の春に外務省専門職員採用試験に挑みます。
また、本学の伝統として、日本政府の在外公館で公館業務をサポートする「在外公館派遣員」も多数輩出しており、
今日までの派遣員総数は54名で、現在も6名が赴任中です。建学の精神にある「他者への献身」を発揮しながら、今日も外交の舞台裏を卒業生たちが支えています。

INTERVIEW

2年間の任期を終えて。在外公館派遣員として学んだこと。

英語力を活かしながら、在ボツワナ日本国大使館で派遣員として勤務。

「多岐に渡る仕事内容を通じ、さまざまな経験を積めることが業務の醍醐味です。日本人職員の補佐に加え、現地職員のマネジメントの一端も担いますので、気持ちの良いコミュニケーションを常に意識しています」。

沖廣一正さんは、国際学部外国語学科英米語専攻の2020年卒業生。大学卒業後、南部アフリカの在ボツワナ日本国大使館に在外公館派遣員として派遣され、現在官房班と広報文化班に所属する。具体的にはどのような業務を担っているのだろうか。

「官房班としては、公用出張者が来訪する際の空港における作業やホテルの予約をはじめ、文書作成や対外的な折衝への立ち合い、広報文化班では広報活動の支援として、SNSの運営や、各種行事の準備・実行まで幅広く携わっています。大学時代に鍛えた英語力で現場に貢献できることに、大きなやりがいを感じています」。

沖廣さんが在外公館派遣員の存在を知ったのは、カナダのリジャイナ大学への交換留学からの帰国後だった。在タイ日本国大使館での派遣員経験のある、学長室企画課の宮田裕生課長（外国語学部英米学科1991年卒業生）から話を聞き、憧れを強めた。

「語学力で在外公館に貢献できる仕事に魅力を感じ、外務省在外公館派遣員試験に向けて勉強を開始、合格することができました。失敗したこともありますが、それも含めて全てが自分の糧になっています」。

グローバルな職場で必須となるコミュニケーション力を身につけて新たな世界で活躍したい。

沖廣さんの2年間の任期は、2022年3月に終わる。天理大学での日々を振り返りながら、彼はこう語る。

「グローバルな環境の現在の職場において、天理大学で培った多様な他者を受けいれる力や、コミュニケーション力が役立っています。外交の世界を支えるためには、コツコツと学び続ける姿勢や人間性が非常に大切ですので、そうした力を育む『外交官養成プロジェクト』の取り組みは、素晴らしいと感じます。僕も帰国後、派遣員としての経験を活かし、新たな世界に挑戦したいと思います」。

PROFILE

在ボツワナ日本国大使館
派遣員
沖廣（おきひろ） 一正（かずまさ）さん

国際学部外国語学科英米語専攻、2020年3月卒業。在学中には、カナダ・リジャイナ大学に交換留学。2020年3月より、在ボツワナ日本国大使館にて在外公館派遣員として勤務中（2022年3月迄）。

天理大学のキャリア教育

組織や人に貢献する
人材を育成する。

企業からの〝声〟。

天理大学生を採用した企業から、
例年好意的な評価が寄せられています。
本コーナーでは、その代表的な声と
高評価の秘訣を解説します。

“明るく元気で、優しい”

“高いコミュニケーション力を、重宝”

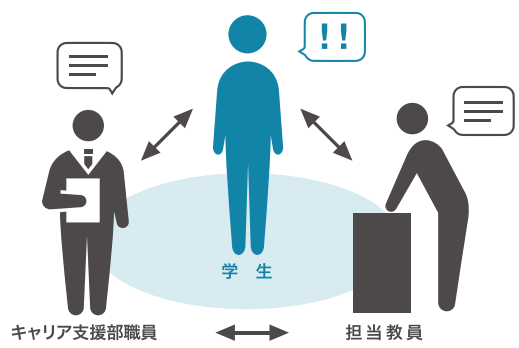
ビジネスマナーなど社会人としての基礎的素地に加え、協調性やコミュニケーション力、適応能力が高く、努力を惜しまない姿勢が共通している。主体的に行動できる卒業生が多く、年月を経て能力を伸ばしていく向上心が評価できる。

［解説］
天理大学では、健全で前向きなキャリア観を醸成し、仕事への基本的姿勢やマナーの大切さを伝えることを重要視しています。学生一人ひとりに仕事の喜びを伝えながら、本学の学生が持つ高い“人間力”を社会で最大限に活かす道をともに探ります。こうしたキャリア教育の特徴に加え、ボランティア活動や部活動を通じて培われたコミュニケーション力が、多くの職場に貢献していると考えられます。

人と積極的にかかわり、周囲を盛り上げようとする明るさや、誰とでも対等に接しようとするフェアな姿勢や優しさを感じる。

［解説］
天理大学の学生は明るく、優しい。そんな評価をよくいただきます。「他者への献身」を建学の精神に掲げる本学では、他者を想い、サポートするボランティアや課外活動の機会も充実。単に知識を蓄えるのではなく、その力や知識をどんな風に活かし、どのように周囲に貢献できるのかを考える姿勢を身につけるように指導しています。

強みを導く“秘訣”。



天理大学生の特長

4学部で展開する専門性と豊かな教養を育む教育は、社会が要請する即戦力の育成につながっています。また、多くの企業から本学卒業生への評価として「人や周囲のことを考えて行動できる」「率先して動き、取り組む姿勢がある」との声が寄せられています。かかわる人すべてを大切にする誠意と、自分も周囲も笑顔にする力が、天理大学生の強さの源泉です。

貢献する力　コミュニケーション力　深い教養

教職員の強固な連携

キャリア支援課スタッフと担当教員との細やかな連携により、少人数制のもとで学生全員と1対1で向き合い、それぞれの目標達成を支えています。重視するのは、学生の個性や意志をどう活かせるかという視点と対話です。何がしたいか、そして周囲のために何ができるのかを考え、行動していくのは学生自身です。お仕着せ型の視線ではなく、学生が主体的に進路を選び、人生を切り拓くことを主眼に置いています。

“圧倒的な、語学力”

高い語学力を活かし、採用部門で天理大学の卒業生が活躍している。英語以外にも、ロシア語など一般的にはマイナーな言語に長けた出身者が多いことにも感心。

[解 説]
1925年に外国語学校として創設した天理大学は、90年余におよぶ国際教育の実績から、さまざまな国際体験・語学学習の機会を提供しています。各種語学検定のサポートにも力を入れており、多くの卒業生が高い語学力を活かして働いています。

“国際性と想いやり が、魅力です”

多種多様な国籍の方が働く当社では、異文化を理解する力を具えた天理大学の卒業生を非常に重宝している。宗教的な素養もあり、仲間を想いやりながら周囲に貢献できる穏やかな人間性が魅力だと感じている。

[解 説]
天理大学の卒業生が社会で発揮する強み——それは「貢献の精神」です。本学は、少人数制による専門教育、留学・海外研修制度の充実に定評があり、海外や地域社会で貢献活動に参加する機会が豊富に用意されています。「宗教性」「国際性」「貢献性」を重視する本学で、学生たちは歴史を動かしてきた宗教を理解し、海外へ出て国際感覚を磨くなかで、自ずと身につけた「他者への献身」という視点が、豊かな人間性へとつながっています。

“失敗を恐れず挑戦する姿勢や、ストレス耐性の高さを評価”

スポーツ経験者が多いからか、ストレス耐性が高く、粘り強く頑張る卒業生が多い。礼儀正しく、マナーが良い点も素晴らしい。

[解 説]
体育学部を中心に、スポーツ系の部活動に所属し文武両道で頑張る学生が多く在籍することが本学の特徴のひとつです。上下関係を学び、全力で競技に打ち込んだ時間が、協調性や人間性を磨きます。また、キャリア支援課では、「身体で覚える就活のポイント」として、①挨拶をする②前方へ座る③座った椅子を元の位置に戻す④ゴミを片づける⑤集中するの5点をポイントに指導。社会人の基礎となる礼儀作法の大切さを伝えています。

就職実績 ※2021年３月卒業生実績

〈全学就職実績〉 ALL 95.3%

〈体育学部〉 99.0%

●主な就職先
リコー/東芝/東レ/クボタ/サイエンス/グローリー/渡辺パイプ/JR西日本/センコー/日本新薬/共和/南都銀行/岩井コスモ証券/オリックス自動車/ミルックス/間口グループ/スズキ自販奈良/シーメック/アイ・ケイ・ケイ/マックアース/ユニチカ/豊田自動織機/ゼビオ/東急リバブル/FEEL CONNECTION/ジャクパ/警察（全国）/消防（京都市、奈良県など）/法務省矯正局（刑務官）/三重県/山添村　他

〈国際学部〉 94.5%

●主な就職先
東芝/ホシデン/共和/日本ハウスホールディングス/信和建設/大和ガス/ニトリ/NTTドコモ/中部ケーブルネットワーク/JR東海/近畿日本鉄道/丸和運輸機関/共同精版印刷/オージス総研/ファイテン/東洋スクリーン工業/オンワード樫山/ライフコーポレーション/カインズ/アダストリア/南都銀行/中国銀行/大和信用金庫/西尾レントオール/かいげつ/湯快リゾート/奈良県農業協同組合/警察（奈良県、大阪府など）　他

〈文学部〉 83.9%

●主な就職先
Francfranc/あさひ/カクタス/ロードカー/アーネストワン/ノベルズ/みやまえ/JR九州/ヨドバシカメラ/関西丸和ロジスティクス/日産プリンス奈良販売/北伊勢上野信用金庫/ギガス（ケーズデンキ）/万代/ルピー/高知県農業協同組合/はま寿司/イーナ/ウィルウェイ/奈良自動車学校/天理よろづ相談所病院/日本赤十字社/防衛省自衛隊/教員（奈良県）/橋本市　他

〈人間学部〉 97.3%

●主な就職先
天理よろづ相談所病院/協同福祉会あすなら苑/功有会/鴻池会秋津鴻池病院/洛和会ヘルスケアシステム/橿原市社会福祉協議会/一条工務店/アイ工務店/エディオン/三笑堂/岡村印刷工業/ユナイテッドソフトウェア/ネクステージ/ホンダネット京奈/大阪厚生信用金庫/奈良県農業協同組合/オークホテル/セコム/TETRAPOT/大阪府/奈良県/名古屋市/中津市/警察（大阪府）　他

News Topics

柔道部員が特殊詐欺・飲酒運転ダブルゼロに向けた啓発活動に参加

10月8日、本学は天理警察署と協働で、特殊詐欺・飲酒運転ダブルゼロに向けた啓発活動を展開した。連携協定後初となる社会貢献活動として、啓発ポスターの制作発表、一日署長となった柔道部員が天理署管内の金融機関を巡回するなどの啓発活動を行った。

小畑天理警察署長は、「オリンピックでの大野選手の活躍や、穴井監督の解説で大きな話題を生んだ天大柔道部のパワーを、特殊詐欺や飲酒運転防止に繋げていきたい」と期待を語った。

体育学部教授が高齢者の健康寿命に助力

10月8日、体育学部の中谷敏昭教授と、天理市健康推進課、天理市健康づくりグループ「友の会」が連携し、体力測定を長柄運動公園体育館で実施した。

この体力測定は、中谷教授が平成18年から始めたもので、平成30年からは文科省の「私立大学研究ブランディング事業」に採択された本学の事業活動の一環として実施されている。

コロナ禍の影響で2年ぶりの開催となった今年は46人が参加。高齢者が多く参加しており、「健康寿命」の啓発として地域貢献の一助となった。

『新天理図書館善本叢書 31-36 連歌俳諧』が文部科学大臣賞を受賞

天理大学附属天理図書館編『新天理図書館善本叢書 31-36 連歌俳諧 全六巻』が、俳聖松尾芭蕉の遺徳をしのぶ第75回「芭蕉祭」（令和3年度）において、文部科学大臣賞を受賞した。本賞は、伊賀市の松尾芭蕉顕彰事業の一環として、俳文学関係著書の中から授与されるもの。

六巻の内容は、『連歌巻子本集　一』『連歌巻子本集　二』『西鶴自筆本集』『芭蕉集自筆本・鯉屋物』『蕪村集 一』『蕪村集 二』。

川西町との包括連携協定

12月10日、本学は奈良県川西町と「包括的連携に関する協定」を締結した。

本学はこれまでにも、同町に対して教員が教育・福祉面での貢献、また学生による国際交流の支援など、各分野で連携を行っており、同町が県と「まほろば健康パークと連携したウェルネスタウン」を進めるにあたり、連携をより拡大する意図で今回の締結となった。

永尾学長は、「さまざまな面で川西町の町づくりに貢献できるよう学生とともに地域の人々と協働していきたい」と抱負を述べた。

天理大学 まほろば募金

人材育成へのご協力のお願い ———

新たな時代の要請に的確に応えうる大学を目指し、「宗教性」「国際性」「貢献性」を身につけた人材を養成しています。

■ 募金の種類：奨学金事業推進、グローバル化推進、創立100周年事業推進、施設設備整備推進、課外活動推進

■ 寄付金に関するお問い合わせ：天理大学 学長室企画課 TEL:0743-63-9012

コロナ禍の学生支援 学びの情熱を支えるために。

（写真1：ピュアウォッシャー贈呈式）

（写真2：若者応援プロジェクト奈良）

（写真3：天理まなび支え合い塾）

本学では、卒業生や地域の人々と協力して、コロナ禍における学生支援をさまざまなかたちで取り組んでいます。

10月15日、杣之内キャンパスの学生ホールに業務用加湿空気清浄機「ピュアウォッシャー」を設置しました。導入のきっかけとなったのは、ラグビーリーグワン所属のクボタスピアーズ船橋・東京ベイ。チームに多数在籍している本学の卒業生が、「母校への恩返し」にと、「ピュアウォッシャー」贈呈を計画し、秋学期の普通授業開始に合わせて設置されました。（写真1）

また奈良県生活協同組合連合会らの申し出を受け、10月29日・12月13日に食料を無料配布する「若者応援プロジェクト奈良」を共同で実施。約200名の学生に食料品の詰め合わせセットを配布する支援活動を展開しました。（写真2）

この他にも、大学生が受験を控えた中学生を指導することで収入を得る「天理まなび支え合い塾」（天理市主催）を学生に紹介するなど、学生の学びの情熱を支えるため、各方面との協働による学生支援を行っています。（写真3）

天理市周辺の名店とその逸品を紹介

THE 天理ゴハン

金沢カレーが奈良県に初上陸

天理市にオープン（10月5日）したゴーゴーカレーは、濃厚なルー、フォークで食べるなどの特徴を持つ金沢カレー。人気のロースカツカレーは食欲をそそるスパイスの香りとサクサクのカツが相性抜群の逸品です。店長お勧めの食べ方は、福神漬けとマヨネーズをルーに合わせる食べ方。コクがましてさらに美味になるそうです。

「ロースカツカレー　中盛」：¥800-（税込）
【ゴーゴーカレー】〒632-0016 奈良県天理市川原城町276-2
近鉄天理線/天理駅 徒歩4分　Tel: 0743-63-5540（年中無休）

受賞報告

天理大学附属おやさと研究所
講師　澤井（さわい）　真（まこと）

『イスラームのアダム
—人間をめぐる
イスラーム神秘主義の源流』
（2020年12月18日発行・
慶應義塾大学出版会）

澤井真講師が栄えある日本宗教学会賞を受賞

天理大学おやさと研究所の澤井真講師の著作『イスラームのアダム—人間をめぐるイスラーム神秘主義の源流』が、9月8日に開催された日本宗教学会総会の席上で2021年度日本宗教学会賞を受賞した。

日本宗教学会は1930年に創立。創立25周年にあたり、初代会長である姉崎正治の足跡を記念し、斯学奨励の意味をもって姉崎記念賞を設定。1966年からは、姉崎記念賞を継承するものとして、「日本宗教学会賞」を設定し、優れた業績を残した個人に対して、毎年表彰が行われている。

学術的な意義として、「宗教学とイスラーム思想研究を架橋しようとした著者の意気込みを高く評価した」「人間学の分野において、宗教学者に広く刺激を与える貢献をなしている」「難解なアラビア語一次資料を読み込んだ、精緻な文献学的読解がなされている」と、3つの視点から評価。「本書は、宗教学とイスラーム学を架橋し、イスラームにおける神秘主義的人間学を明らかにしようとした意欲作である。」とし、受賞に至った評価について明らかにしている。

また同著は、2021年度の印度学宗教学会賞を受賞。日本宗教学会賞に続く2つ目の受賞となった。